

## 文学倫理学批評の理論構築とその観点

任, 潔  
中国・浙江大学外国語学院 : 副研究員

<https://doi.org/10.15017/6617998>

---

出版情報 : 九大日文. 40, pp.2-20, 2022-10-01. Association of Japanese Literature, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

# 文学倫理学批評の理論構築とその観点

任 潔

倫理批評<sup>①</sup>の歴史を辿ると、その期限は古代ギリシアにまで遡れるが、二十世紀六十年代に入ってから以降、欧米の民権運動、反戦運動、学生運動、女性解放運動、環境保護運動などの高まりとともに最高潮に達し、批評の倫理性を強調するフェミニズム批評、新歴史主義批評、文化批評などが盛んに行われた。だが、自分なりの術語と理論の特色がないため、また方法論として文学倫理学から独立できなかったという原因で、九十年代に入ると、急速に衰えていった。

一方、中国における文学批評が西方から強く影響されている。改革開放政策が実施されて以降、学界では西方からの文学理論と批評方法を積極的に吸収する態度が見られ、外来した文学理論が共存する状態にある。しかし、西方からの文学理論と批評方法の影響の下で、中国における文学批評は文学から遠く離れており、理論コンプレックス (Theoretical Complex)、命題コンプレックス (Preordained Complex)、術語コンプレックス (Term Complex) の傾向が著しくなり、「芸術のための芸術」という文学観によって、倫理的価値よりも文学作品における美的価値が重視されている。さらに、市場経済の影響の下で倫理的価値が

排斥され、文学作品の商品としての価値を強調する傾向が見られる。

こうした学術的ないし時代背景のなかで、文学倫理学批評が二〇〇四年十月に聶珍釗氏によって提唱された。その後十年の間に著しい発展を遂げ、特に、世界各国からの多数の学者が参加することで、さらなる発展、国際化され、国際学界でも広く認められている。二〇一二年には、国際文学倫理学批評研究会 (IAELC) が設立され、これまでに中国・上海 (二〇一四年)、韓国・ソウル (二〇一五年)、イギリス・ロンドン (二〇一六年)、エストニア・タルトゥウ (二〇一七年) で年会及び国際学術研究討論会を開催してきた。そして二〇一八年、第八回国際文学倫理学批評研究会年会及び国際シンポジウムが日本 (七月二十七日、三十日、北九州国際会議場) で開催されることになった。それをきっかけにして、文学倫理学批評の影響力が日本学界にまで広がった。九州大学の波瀾剛氏、福岡大学の大嶋仁氏をはじめとする学者たちは、文学倫理学批評を日本文学研究に適用する可能性を探求するため、優れた研究を展開してきた。

周知の通りに、日本文学史上における代表的な作品は、多少とも倫理的な要素が含まれ、それが文学倫理学批評によって日本文学を分析する前提となれるだろう。しかし、以上述べたように、文学倫理学批評は単に倫理的視点から文学を批評するのではなく、史的唯物論の立場から批評を展開するのである。例えば、倫理に関する諸問題を分析するとき、当世の道徳的規範に従うのではなく、史的唯物論の観点から出発して、作品の創

作された時代に行き戻り、その時代の通用する道徳的規範に従って作品の倫理的価値を発見する。したがって、アメリカの倫理批評や中国の伝統的道徳批評と比べて、文学倫理学批評は独自の特徴を有し、それを日本文学研究に用いれば以前と違う結論が出てくるのだろう。そのほか、「文学」「倫理」「テクスト」などのような文学に関する基本的な概念に対しては、新たな見解が持っているため、日本文学研究に新風を吹き込んでくれるだろう。

## 一、倫理、文学および文学倫理学批評

文学倫理学批評の立場からすると、文学とは道徳の産物であり、人類がある特定の歴史段階で倫理を表現するために用いる形式の一つである。人類は倫理を表すために文字を作り出し、その文字を使って日常生活および人類自身の倫理に対する理解を記した。こうしてテクストが生まれ、最初の文学が誕生した。ただし、文学倫理学批評の術語としての「倫理」は、倫理学における「倫理」とは異なる。それは、文学作品における虚構人物の間の倫理や、社会にある倫理関係と道徳秩序を含み、さらに現代の概念では人と自然、人と宇宙の道徳関係、すなわち道徳秩序をも含む。具体的な文学作品における倫理の核心的な内容は、すでに認められた、人と人、人と社会および人と自然の倫理関係、またその上に築かれた道徳秩序とその秩序を守るための各規則である。文学の役割は、まさにこのような倫理関係

と道徳秩序の変化、およびその変化がもたらした問題を記し、人類文明の進歩のために経験と教訓を残すことである。

ダーウィン (Charles Robert Darwin) の進化論によれば、人類は生存競争を経て猿から人間へ進化してきた。すなわち獣類から独立し、獣類より高級な個体に発展してきた。しかし、人類は自然選択 (natural selection) によって人間という形を得たが、その段階ではまだ本質を得ていない。人類に倫理意識が生まれてはじめて、獣類と真に分けられることになったのである。当初、人間は血縁関係とその上に築かれた倫理秩序の重要性を認識し、血縁関係の破綻は不幸だと考えていた。後に、理性的に、なぜ血縁関係が重要なのかを考え、また血縁によって築かれた各関係について解釈しはじめた。血縁関係の重要性に対する思考と認識こそ、人類の最初の倫理意識である。倫理意識が芽生えたあと、人類は生存と繁殖に対する倫理秩序の重要性を認識し、倫理の混乱状態 (chaos) から脱出して倫理秩序を築きたいと考えるようになった。そして、基本的な倫理規則、例えばタブー、責任、義務などにしたがって行動しようとするようになった。人類の理性が成熟すればするほど倫理意識は深まり、それに対応する倫理概念も形成されていった。理性の働きによって、人類は自分を知る方法と日常生活の中で正確な倫理的選択をするための方法を考えはじめ、さらには一定の形をとって自分の倫理経験を残し後代および他者に伝えたいと思うようになった。人類の倫理意識の成熟、ならびに倫理経験を残したいという願望が、人類文明史における文字および文学の出現を促した。

人類文明の最初期、倫理秩序を支えていた核心的な要素は禁忌であった。禁忌は古代人類の倫理秩序の基礎であり、保障である。禁忌は道徳の始まりとして、人類文明の発展に伴い、道徳あるいは道徳の表現形式の一つになった。人類社会の倫理秩序の形成と変化は、禁忌を前提にしていると言える。文学の最初の目的は、禁忌を文字化することであった。中国で最初に文字化された禁忌形式は卜辞である。ヨーロッパではしばしば神託(Oracle)と呼ぶ。文字化されることによって禁忌は制度化され、秩序、すなわち倫理秩序へと変化した。人類の社会制度が作り出され、文字化した法律が現れた後にも、文学は依然として社会制度といまだ文字化されていない法律との文学表現形式であった。これは、現在では芸術表現形式と呼ばれている。したがって、文学の倫理機能は、文学が誕生した最初期にすでに存在していたと言える。後にその機能に変化はあつたが、文学の倫理的性質は変わっていない。こう考えてみれば、文学倫理学批評の使命は、まさに文学の倫理機能を解釈し、倫理の視点から文学に描かれる生活現象およびその存在の倫理原因を追究し、価値判断をすることである。

文明発展の歴史的視点から見ると、文学は人類史の一部分にすぎない。歴史を越えることも離れることもなく、ただ歴史を反映するのみである。また、文学は歴史段階によって固有の倫理環境と倫理コンテキストを持つている。文学を理解する際には、この倫理環境と倫理コンテキストから離れてはならない。したがって、過去の文学を現在の倫理環境と倫理コンテキスト

で読むことは、文学の倫理悖反となりうる。ある時代の道徳で認められたものが、必ずしも現在の道徳で認められるとは限らないからである。現在の道徳で認められたものも、別の時代の道徳では認められないかもしれない。過去に非難された文学が現在では高く評価され、過去に高く評価された文学が現在では非難されるということもある。文学倫理学批評は、歴史発展の視点から文学を考察し、倫理という視点から異なる歴史段階における文学を解釈する。そして、異なる倫理環境と倫理コンテキストの中で文学を理解する際に生じうる巨大な齟齬を避けようとする。他の数多くの批評方法に比べ、文学倫理学批評は、抽象的な道徳評価ではなく、文学そのものに対して客観的な倫理解釈を行う。すなわち、文学倫理学批評は解釈批評の特性を持つ。その主要な任務は単に良し悪しを評価することではない。独自の方法で、文学に現れてきた社会生活現象について、客観的な目で倫理分析と倫理帰納を行う。したがって、文学倫理学批評は批評家を文学の歴史現場に連れていき、時には文学作品の登場人物の弁護士を務めさせて人物を理解しようとする。

さらに、文学倫理学批評では、文学の基本機能を教化だと捉える。その教化的機能は、読者が文学を審美的対象とみなす過程において実現される。審美とは美を認識し理解することで、読者が作品を読んだ上での理解と鑑賞を指す。読者は審美の主体であり、文学は審美の対象、すなわち客体である。審美は読者が文学を閲読、理解、鑑賞することを指している。読者にとって審美は、文学の教化的機能を発見し、実現する過程といえ

よう。したがって、審美は文学そのものの機能ではなく、文学の教化的機能を果たすための手段である。さらに言えば、文学の根本的な目的は、人類に娯楽を提供することではない。そうではなくて、倫理の視点から社会と生活を認識するための道德範例を人類に提示し、その物質生活および精神生活に道德の啓示を与え、人類の自己改善のために道德の経験を残すことにあ  
る。

## 二、文字、脳テキストおよび物理的テキスト

文学批評の方法としての文学倫理学批評は、文学に対して独特な認識と理解を持つており、伝統的な文学観に一定の反旗を翻している。その反抗というのも、中国の伝統的な文学理論における文学の定義に関する内容、すなわち、何が文学かという問題を根本から覆すからである。何が文学かという問いは、文学の本質に関わる問題である。文学倫理学批評から見ると、他の文学理論が考察している対象は真の文学ではなく文学の観念にすぎない。文学倫理学批評は、文学観念をめぐる議論から文学それ自体をめぐる議論へ、抽象的な文学に関する議論から具体的な文学作品に関する議論へと移ろうとしている。したがって、文学倫理学批評はまず、文学が存在するための二つの基本前提、文字とテキストを検討しなければならぬ。

近代以降の用語としての文学という語はラテン語の「littera」に由来し、文字そして文字で書かれた手紙を意味する。この語

源からみると、文学には二つの基本前提、文字とテキストがあると見える。文字は意味の担い手で、テキストは文学の形態である。文字はテキストになり、テキストは文学になる。文字は一連の表意符記で、文学ではない。個々の文字は意味を伝えることができるが、それは文字の伝える意味であつて、文学の伝えようとする意味ではない。文字の意味はテキストの意味とは異なる。文字がテキストになる段階では、その意味は単純で、単一的で、また独立している。しかし、文字は能記の意味を持つているため、異なる文字から意味の豊富な、しかも全く異なるテキストになりうる。文字がひとたびテキストになれば、文字テキストへと変化し、その意味はもはや単一の文字の意味ではなくなり、テキストの意味に変わるのだ。

文字が生まれる以前、人々は記憶に頼つて言葉を保存していた。しかし、記憶には時間の限界がある。記憶する者の失踪や死亡にともない、言葉の記憶も消失する。記憶は言葉を永久には保存できない。言葉はそもそも意味を伝えるための方法の一つだ。すなわち、語音という形を通して意味を伝える。では、言葉が伝える意味はどこにあるのか。それは脳である。

脳テキストとは、人間の頭脳に蓄えられている記憶を指す。記憶は、人間が五官を通じて得た世界に対する感知である。脳テキストは回想によって引き出され、発声器官と聴覚器官で再現され、陶片、草紙、亀の甲、青銅、紙などの物質材料に載せて物理的テキストに変えることもできる。媒介の点で、脳テキストは特殊な生物形態であり、テキストの最初の形態でもある。

物理的テキストと電子的テキストが出現する前、非物質形態の意識は記憶という形式で脳テキストに蓄えるほかなかった。脳テキストは生物形態のテキストであるから、そのままの形で他者に移すことはできず、口から口へとしか伝達することができなかった。加えて、永久には保存できない。したがって、少なくとも脳テキストには、物理的テキストによって保存されてきたものもあるが、大量の文学性質を持つ脳テキストの多くは所有者の死亡とともに永久に失われてきたのである。現在でもなお、物理的テキストであれ電子的テキストであれ、根本的には、ともに脳テキストからの複写、加工、保存および再現である。脳テキストなしには、物理的テキストも電子的テキストも存在しえない。また、文学創作もない。そして、どんな形式の文字も作り出されることはない。

テキストの発展から言うと、文字の出現以降、言語の音声形式によってしか再現できなかった脳テキストは、視覚的に読める物理的テキストに変換できるようになった。こうして、人類の言葉と思想は記録され、保存されるようになった。つまり、文字が出現してはじめて、無形の言語が文字を表意記号とするテキストに変わるようになり、脳テキストの記録と保存が可能になったのである。

言葉は頭脳思考の道具であり、また表現形式でもある。言葉は意識の形式であり、その媒介するのは音声である。言葉は発声器官を通じて伝え、聴覚器官を通じて受ける。文字が媒介するのは表意記号で、筆記用具と筆記用紙によって形になる。言

語は人間の発声器官に依存しており、人類が思想を伝え交流するための音声形式である。しかし、言語は記憶なしには保存できない。人間は頭脳を使って保存されている言語を回想し、発声器官によってその言語を再現する。現代科学が発達する以前、言語は人間の発声器官によって伝えられ、また、聴覚器官によってその意味を理解されていた。一方、視覚では認識することは実現されていなかった。文字が現れてはじめて、言語は文字に記録され、そして保存されるようになった。言語は文字に記録されてから、元来の運び手である頭脳および表現道具である発声器官から解放され、新たな形式、すなわち文字符記に変換された。

言語は非物質形態で、文字は物質形態である。言語は文字に記録され、無形の言語（言語の形式は音声形式とも呼ばれている）が有形の文字に変わった。異なる文字が組み合わされ、複雑なテキスト、すなわち文字テキストになった。文字テキストは口頭言語と異なり、石板、銅器、亀の甲、竹簡、木片、絹、紙などの物質的材料に書かれている、あるいは印刷されている。文字テキストは保存された言葉であり、思想の物質的形態であり、視覚器官を通して識別されたり読み取られたりする。

口頭言語は思想の音声形式である。発声器官によって伝達され、聴覚器官によって理解される。文字テキストは発声器官を通して音声形式に変換できるが、また口頭言語も筆記用具や材料を通して文字テキストに変換できる。しかし、口頭言語はテキストに変換されるまで、記憶されることはできるが、保存や

再現されることはできない。したがって、テキストは一定の媒介を通して文字という媒体から構成される言語と思想であり、テキストの文字は特定の道具によって認識、解読、理解される。科学が著しく発達した現代では、言語と思想は電子的テキストに変換できるが、文字も電子的テキストに変換できる。電子テキストもまた特定の道具によって認識、解読、理解される。それに対して、言語は記憶されることはできるが、永久には保存できず、記憶する者の死亡とともに消えていくほかはない。

### 三、文学の物質的形態

文学の形態に関して、中国で刊行されている文学理論書では「社会的意識諸形態」<sup>(9)</sup>あるいは「審美的意識形態」<sup>(10)</sup>と見なしている。それに従って哲学的な認識論から文学を見ると、文学は意識形態としての客観的存在の反映である。文学表現の根源は客観存在にある。文学を「言葉の芸術」<sup>(4)</sup>と呼ぶ学者もいる。そのような観点を持つ人は、文学について次のように考える。

〔引用者注：書かれたものが〕文学になるにはまず文字テキストでなければならぬ。そのテキストは、語音、単語、構造など一定の存在形態を持つている。口頭の形式、文字を通じて、あるいは印刷品、メディアの形式で伝えられていく。<sup>(5)</sup> それゆえ、文学は「テキストを通じて作者、世界、読者などを結びつける感性的で複雑な存在であり、審美経験を凝集してできる文字テキストだ」<sup>(6)</sup>と解釈できる。ほかに、「文学は主体の審美的

意識が言語記号化されたものである」<sup>(7)</sup>と主張する学者もいる。このような定義は、「人と外部世界との審美関係の上に、主体の審美意識が文学の性質にとつての重要性も意識した。また、社会学、認識論、表現論および形式論から文学の本質を単純に定義づけるのを避け、言語の本体から文学と他の芸術形式を区別し、文学の本体と比較的に適合している」<sup>(8)</sup>と指摘している。実際には、「言語記号化表現」はさして新しい観点ではなく、文学は「社会的意識諸形態」ないし「審美的意識形態」の別の表現にすぎない。

文学が「社会的意識諸形態」もしくは「審美的意識形態」であるという見方は、現在、中国で主流をなす観点である。数多くの文学理論書から「何が文学か」に関する解釈を読むことができる。これらの解釈で使われる用語は種々あるが、それらの本質は「文学は社会的意識諸形態である」という観点から乖離していない。例えば、文学は「一定の社会生活が人間の頭脳によって反映された産物」<sup>(9)</sup>であると指摘する文学理論書がある。文学は歴史社会の産物で、一種の社会現象である。したがって、文学とは「言葉を形としての審美的意識形態」<sup>(10)</sup>である。このような観点は、「文学は社会的意識諸形態である」という観点に若干の変化を加えたに過ぎず、その本質が変わったわけではない。現在、中国国内の大学で使用されている多数の文学理論書を見ると、何が文学かという問題に関する解釈は、それぞれ異なる表現を使っているもののその本質は変わらない。とはいえ、国内の文学理論書は、何が文学かという問題をまだ根本的

には解決していない。

「文学は社会的意識諸形態である」という観点では、文学の形態を科学的に説明できない。「意識形態」は抽象的な思想で、文学が伝えようとする意義であり、文学存在の形態になることはできない。思想、言葉、文字、テクストと文学との関係において、思想は抽象的な思考形式であるため、言葉と文字によってしか伝えることができない。そして、言語は音声形式の一種であるため、発声器官によってしか表現できない。思想、言葉、文字自体は文学ではなく、文学を作り出す条件である。思想と言葉は、文字によってテクストに変換されてはじめて、文学として出現する。したがって、文学とは文学テクストのことである。文学言語や文学思想などは文学テクストがあつてこそその言葉で、つまり、文学テクストの言葉と思想である。文学は文学テクストであるがゆえに、文学の物質的形態が決められるのだ。すなわち、文学は一種の物質的存在なのである。

文字は意思の運び手で、文字からテクストが作られる。テクストは文学の運び手で、文学の文体、例えば詩、ドラマ、小説などの形式を生み出す。文字が明確に意味を表すため、文学は文字の認識および解読によってテクストの意味を得る。つまり、文学を読むことは、文字からできている文学テクストを読むことに当たる。

文字は言葉と思想を記録・保存するための道具である。文字の機能は言葉、思想および事件を記録することである。記録された文字はテクストになる。文学創作は文字なしには果たせな

いが、文字は文学創作の道具にすぎない。作家たちが文字で文学を創作してはじめて、抽象的な思想が文学テクストに変わる。したがって、作者が様々な意味を指す文字からテクストを組む過程が、文学創作の過程である。文学創作の結果はテクストに表れる。数が膨大で、意味も複雑な文字をテクストに組み合わせる。文字の組み合わせから多種多様な文学になるがゆえに、文学は色褪せることなく、現在においても人類の欠かせない精神的な食糧になつている。

上述のように、文学の運び手は文学テクストである。それゆえ、テクストなくして文学もない。しかし、テクストをなす文字は、数量の制限がない。具体的な事物や思想を述べる文字でさえすれば、文学になり得る。したがって、一個あるいは数個の明確な意味を持つ文字から組み合わせることができれば、文学テクストは数十、数百、数千、数万、数十万、ひいては数百万の明確な意味を持つ文字から組み合わせられる。文字は最初期、まだ複雑な事件と思想を記述できるほど豊かではなかった。テクストは大概少数の文字から作られ、それによって記された事物や思想も極めて単純なものであつた。当時、詩や戯曲、小説といった文学体裁はまだ存在していなかったが、文字から組み合わせられたテクストはすでに存在していた。現在存在する詩、戯曲、小説などの概念が誕生する前、文字からなるテクストがまさしく当時の文学であつた。言い換えれば、文学はその芸術形式、例えば詩、戯曲、小説などの文学体裁によって分類でき



る段階にまで発展する前は、あらゆるテキスト、宗教的な祭りを記す記録であれ、日常生活を記す日記であれ、文字の数を問わず、全てが早期の文学に属していた。例えば、三千年余り前の中国の卜辞（陶文は未だ識別できていないため、文字として認定できない<sup>11)</sup>）、古代エジプト時代に墓碑に刻まれた、あるいはパピルスに書かれたヒエログリフの文字、古代シユメール人が石板または粘土板に刻んだ楔形文字など、それらは全て最初の文学と見なしうる。

エレクトロニクス技術が文学の領域に脚を踏み入れる前、文字からテキストへと形式化されるのが文学の唯一の方法であった。そのため、文字テキストは、文学を考察する際の前提と基礎である。文字テキストは、異なる文字から組み合わされた一定の意味を持つ物質的形式、あるいは形態である。例えば、石、獣骨、竹、粘土板、パピルスなどの物質的材料に書かれた特定の意味を持つ文字などは、全て文字テキストと称される。これらの文字が現れた時代に、文学についての共通概念はまだ形成されていなかったため、これらのテキストは、現在から見れば歴史、哲学、または自然科学などに属するかもしれないが、当時は全て文学の範疇にあった。後に、人類の認識水準が高まるにつれ、文字テキストの性質について新たな理解と認識が生まれ、新しい概念と標準が生まれた。歴史的、また哲学的なテキストなどは分離され、文学的なテキストのみ残され、それらは文学テキストと名付けられた。文学テキストは文学観念の登場とともに文字テキストから独立し、文学特有のテキストになっ

た。文学テキストの性質は、文字テキストの文学的な性質によって決めているのである。典型的な文学テキストは詩、戯曲、小説の文字テキストである。文学テキストは文字テキストから独立したため、文学テキストの部類に入らなかったテキストは全て非文学テキストに属す。ただし、それらは各自のテキストの性質によって他の部類、例えば哲学テキスト、歴史テキスト、科学テキストなどに分けられる可能性も持つ。文学テキストの概念が形成されてから、人々は徐々に文学の観念を受け入れてきたのである。

文学観念は、文学の発展とともに認識され、受け入れられ、そして発展してきた。それゆえ、文学観念の形成過程は、倫理過程とも言える。文学発展の歴史から見ると、文字テキストが文学テキストと見なされる過程は、本質的には文字テキストが倫理化される過程である。例えば、ウォルター・ホイットマンの自由詩が受け入れられ、自由詩の文学観念が形成される前は、分析できる押韻した詩テキストしか詩と称されなかった。しかし、自由詩という文学概念が形成されてから、詩に関する伝統的な観念は変わった。韻を踏んでおらず、固定的な韻律構造がなくても、戯曲や小説、伝統的な詩に属していない文字テキストは自由体詩として詩に分類されるようになった。このような詩は、倫理的な面で認められたがゆえに、その詩のテキストは文学テキストに分類され、詩の中の重要な一分野となったのである。

文学テキストは、文学を理解するのに極めて重要な役割を果

たしている。文学テキストは物質形態的な特徴を持つているがゆえに、文学を読解し、定義することができる。さらに、文学に属さない他の芸術形式、例えば音楽や絵画、彫刻、また現在は文学と認識されている口頭文学などと区別されることもできたのである。芸術も思想と感情を表しており芸術性を備えているが、形式の上では文学の本質的な特徴がないため、文学ではなく芸術に属している。文学と芸術の違いはまず、文字テキストがあるかどうかという点にある。文学には文字テキストがあり、芸術には文字テキストがない。それが芸術から文学を区別する基本的な特徴である。例えば、音楽と絵画は独自のテキストを持つている。しかし、音楽は音楽の特殊記号である楽譜から音楽テキストが作られる。絵画では、描線、光線、色彩から絵画テキストが作られる。それらは文字テキストではない。したがって、音楽と絵画を文学の部類に分類することはできない。

詩、戯曲、小説などの文学概念が形成される前と形成された後にかかわらず、文字テキストは文学が他の芸術形式から区別される本質的な特徴を示している。戯曲と映画はそれを解釈できる最も典型的な例である。戯曲の演出と映画の放送は芸術表現であるため、演出される戯曲と放送される映画は芸術に属している。しかし、戯曲演出および映画撮影用の文字テキストは、文学になり得る。我々が現在語っている口頭文学は、口頭で表現された文学だと考えられており、口頭で表現すること自体は文学ではない。我々が常に話している口頭文学は実は偽命題である。なぜなら、そもそも口頭文学という言い方は間違っ

ており、口頭という表現方式で呼ぶべきだからだ。我々が議論している口頭文学は、口頭芝居や口頭漫才芸術と同じく、口頭で表現する方式だけであり、文学ではない。したがって、文字テキストは文学を他の芸術形式と区別する唯一の特徴である。

科学の発展にともない、文学の形式と観念も大きく変化した。これはまず、文学の運び手に影響をもたらし、1940年代以前、電子を運び手とするテキスト形式はまだ世に現れていなかった。我々は紙に印刷された文字記号を識別することによって、読書していた。しかし、エレクトロニクス技術の発展につれて、文学テキストは電子テキストとして保存され、紙テキストよりもっと長く保存できるようになった。電子テキストは、その材質および形式が伝統的なテキストとは異なっているが、電子的な表示装置を用いることで、伝統的なテキストを読むかのように読むことができる。現代科学が文学領域にも応用され、我々が読める文学テキストには書籍、雑誌などの伝統的な紙テキストのほか、テレビ、ラジオ、録音、コンピュータなどによって保存されたテキストも現れている。現在は紙を運び手するテキスト形式がなお主流ではあるが、エレクトロニクス技術が与えた伝統的なテキスト形式への影響の重大さも見逃せない。文学の保存形式の変化とともに、電子テキストも必ずや文学テキストの重要な形式になるだろう。

#### 四、文学の定義とその相対性

文学とは何かという問題については、現在にいたるまで統一的な定義がない。英国百科全書は文学を「書面作品」、また「人類の表現形式の一種」と解釈し、「文字で表すものが必ずしも文学ではない」と述べている。例えば、「情報的、技術的、学術のおよび新聞的な作品は、すべての批評家とは言わないまでも、ほとんどの批評家によって文学から排除されている」と述べ、「一定の創作形式しか文学という芸術と認められていない」と説明する。つまり、純粋な文学形式は叙情詩である。それだけでなく、挽歌、史詩、戯曲、叙事作品と諷刺詩も文学に含まれる。<sup>(1)</sup>

慣習的な文学の定義を考察するには、文学を特定の倫理環境に置いて考察しなければならない。文学観念は特定の倫理環境のもとで形成される。文学を理解するには、その倫理環境を考へなくてはならない。文学の倫理環境に依りて、その定義も異なる。文学の本質から見ると、文学は文学テクストだと定義できる。歴史的な観点から言えば、特定の歴史条件には特定の文学がある。倫理的な観点から言えば、異なる倫理環境から生まれた文学観念は、異なる意味を持つ。例えば、古代ギリシャでは、アリストテレスの文学観念が大衆に受け入れられる以前、全ての文字材料、すなわちテクストが文学だと見なされていた。科学的な著作の作家も詩人と称された。一方、中国の儒学の典型的な作品群は形式から見ると西洋の文学観念に適合しないが、長い間文学の精粹だと言われてきた。要するに、異なる歴史時期には異なる文学観念と文学定義がある。

文学観念はテクストに基づいて形成されたため、以下の面から定義を試みる。

第一に、文学観念が生まれる前のあらゆるテクストである。詩、戯曲、小説などの文学観念が生まれる前、全ての文字材料、すなわちテクストは文学に属していた。その代表的なテクストは、古代エジプト人によってヒエログリフで石碑や石板に刻まれた、もしくはパピルスに書かれたテクスト、シュメール人が楔形文字で書いた粘土板のテクスト、中国人が甲骨文字で刻んだ卜辞などである。

第二に、文学観念に適合する全ての文字材料である。文学テクストは文学観念の産物で、文学観念によって文字テクストを解釈した結果である。詩、戯曲、小説などの類型の文字テクストが現れた後、我々は新しい歴史環境において新しい観念からそのような特定の文学テクストを確認し、普遍的な文学範疇から独立させ、文学を再定義してきた。新しい文学観念の形成と受容は倫理化の過程で生じ、文学テクストは観念の面で進化した結果である。詩、戯曲、小説に関する文学観念が形成されたのち、詩、戯曲、小説の観念に適合する文字テクストは詩、戯曲、小説のテクストと定義されるが、適合しないテクストは文学だと見なされない。しかし、それ以前のあらゆるテクストは依然として文学の範疇に属する。

第三に、詩、戯曲、小説など、叙情、架空類のテクストである。現代文学の観念では、文学の主体は詩、戯曲と小説である。歴史と哲学は文学から分離し、独立した学問になった。そのた

め、文学は詩、戯曲、小説および文学観念によつて文学と認められたその他のテクストを指している。

文学テクストと認められるテクストとそうではないテクストとは、異なつた性質を備えている。文学観念で文学テクストかどうかを判断することによつて、非文学性質の文字テクストは文学から排除される。それ以前は、全ての文字テクストは倫理上、すなわち慣習的に文学と見なされていた。テクスト、すなわち文字テクストは、紙に書かれたかあるいは印刷された文字を指す。紙が発明されて著述と印刷のために広く使われるようになる前には、他の材質、例えば亀の甲、獣骨、石板、粘土板、パピルス、木簡、札竹簡、絹などに書くなり刻むなりされた。それらの、何らかの意味を表す文字は、全て文字テクストと見なされていた。それらの文字の性質に関しては今でも定論がない。しかし、そのような古い文字には論述の特徴が備わっており、記述テクストあるいは哲学テクストと称してよいと考えられる。後の時代に形成された文学観念では、記述と論理は文学の最も重要な特徴として指摘されている。例えば『ホメロス風讃歌』はその例である。したがつて、歴史、哲学などのテクストが文学から切り離される前、文字テクスト、例えば中国の卜辞、儒学の経典などの最も古い文字テクスト群も含めて、全て文学の範疇に入れられていた。

しかし、文学観念は変化し続ける。最初はあらゆる文字材料を指していた。後には詩、戯曲や小説などを主体とする文学作品を指すようになった。文学観念が拡大していくにつれ、文学

は定義上、すでにある文学作品の定義を超えて一つの学問に発展してきた。そのため、文学に関する研究も文学の範疇に入ることになった。文学理論、文学批評、作家と読者についての研究などのテクストは、詩、戯曲、小説などの文学テクストとは大きく異なるが、文学の範疇に属している。これは広義の文学だが、狭義の文学は依然として詩、戯曲、小説などの客観的な存在のテクストを指している。

文学が文字テクストから文学テクストに変わつてきた流れにおいて、文学観念の発展が重要な役割を果たした。文学現象は文学観念より先に現れている。しかし、文学観念が形成されてはじめて、文学テクストの文学的性質が指摘され、その文学が分類され、文学解釈も可能になる。要するに、文学研究なしに文学は成り立たない。例えば、アリストテレスの『詩学』、ホラティウスの『詩について』、劉勰の『文心彫龍』など、これらは、文学の範疇から排除できないものである。そのため、文学テクストは狭義の文学、すなわち詩、戯曲、小説などを指すが、文学には文学テクストのほか、文学テクストを研究するテクストも含まなければならない。

文学の定義は、文学とは何かという問いである。人類が文学を深く理解しようとする時と必ず出会う問題で、同時に、文学を発展させるために解決しなければならぬ問題でもある。文学の概念は、文学テクストの存在の上に築かれてきた。文学テクストなしに、文学観念はない。文学観念はその時点で存在した文学テクストによつて決められる。文学観念は、人類社会が

文学テクストを認識、理解した結果である。文学テクストが認識される前まで、様々な性質のテクストにはそれらを分けられる境界線はなかった。そのため、人々は文学テクストを他のテクストから分ける基準を探そうとしていた。

文学を定義づけるのは依然として困難だが、文学を検討する際には、その基盤としての理論前提を設定しなければならぬ。文学の概念は歴史的な概念で、文学とは何かという問いをより科学的に定義するためには、文学発展の視野から文学を定義づけてよいと考えられる。

第一に、具体的、特定の文学形式が現れ認識される前、文学の範疇は極めて広がった。一切の文字テクストが文学の範疇、すなわち文献 (*literature*) に属していた。例えば古代ギリシャと先秦時代の中国では、あらゆるテクストが文学、すなわち文献に属していた。

第二に、テクストの文体形式、例えば詩、小説、戯曲、歴史などが形成されてから、テクストはそれぞれの文体観念によって詩歌テクスト、小説テクスト、戯曲テクスト、歴史テクストなどに分けられた。習慣に基づいて文学と見なされたテクストもあれば、歴史または科学のテクストと見なされたものもあった。詩、小説、戯曲などは、習慣にしたがって文学としてテクストから独立されることになった。新しい文学観念が確立されてから、文学倫理が役立ちはじめた。歴史的、科学的なテクストなど、以前は文学とみなされていたテクストは、文学から分離され、独立したテクストになった。こうして新しい文学観念

が確立された。

第三に、科学の発展につれてテクストの形式に変化があった。電子テクストという新しいテクスト形式が現れてきたのだ。それゆえ、新たな文学概念も形成されはじめた。新しい文学概念が受容、認識されるとともに、新たな文学倫理も生まれる。このように、文学観念の発展と変遷は、習俗および習慣と結びれている。言い換えれば、文学概念は習俗と習慣、すなわち倫理によつて確立されるのである。したがって、文学概念は倫理概念である。

中国の文学定義に関する論争は、元はと言えば、西洋の文学定義の論争に由来する。中国における近代的な文学理論は、西洋の文学理論から影響を受けて発展してきた。その観点と術語は全て西洋のものである。したがって、文学理論に関する論争も西洋の論争から来ている。西洋の文学理論は、論争の中で発展してきた。ウエレックとウォーレンによる『文学理論』は中国で大きな影響力を持つ学術理論書である。本書は文学の定義を整理し、西洋の文学定義について、「印刷の材料にしろ、手書きの材料にしろ、文明史の研究対象でもあれば、文学研究の対象でもある。それゆえ、一切の印刷品は文学と呼べる」という観点を指摘した。例えば、グリーンロウ (*E. Greenlaw*) は「文明の歴史とかかわる一切のことは、我々の研究範囲にある」と述べ、われわれは「ある時代あるいは文明を理解しようとする時に、『純文学』 (*Baltes Leturs*)、ひいては印刷に回したか回していない原稿に絞らない方がいい」、「文化史への貢献度という観

点から、我々の研究作業を見つめる」<sup>(13)</sup>と述べている。このように文学と文明史と混同して語る方法は、現在から見れば、歴史から独立した文学を解釈できないことになる。

ウエレックとウォーレンが指摘したもう一つの観点は、美学価値と学術名誉を文学の評価基準とした点である。作品の題材を問わず、その「優れた文字表現方式」だけを強調し、文学は名作からなると主張する。歴史上の偉大な哲学者、歴史学者、神学者、道徳家、政治家、はては科学者の著作までも文学に包括された。例えば、18世紀の英国におけるジョージ・バークリー (George Berkeley)、デイヴィッド・ヒューム (David Hume)、ジュネイス・バトラー (Judith P. Butler)、エドワード・ギボン (Edward Gibbon)、エドモンド・バーク (Edmund Burke)、アダム・スミス (Adam Smith) などの作品である。これは「一切の印刷品は文学である」という考えの簡略版にすぎない。文学を非文学から区別しておらず、文学とは何かという問題を説明できていない。ウエレックとウォーレンが指摘しているように、「想像的な文学 (imaginative literature) の発展史を考察する際に、もし名作だけを読むなら、社会的、言語的、イデオロギー的な背景や文学を左右する環境要素をはっきりと認識できない。その上、文学の伝統の連続性、文学類型 (genres) の変化や文学の創作過程の本質も知ることができない」<sup>(14)</sup>。歴史上の文学定義を整理した上で、ウエレックとウォーレンは、文学という言葉は文学芸術、すなわち想像性のある文学を指すことに限るのが最も妥当だと考えた。<sup>(15)</sup> 彼らは、文学には虚構性 (fictionality)、創造性 (invention)

と想像性 (imagination) という三つの基本的特徴があり、その中で虚構性が文学の本質的な特徴だと指摘した。しかし、ウエレックとウォーレンは最終的に文学に関する明白な定義を提示しなかった。

イギリスでは、文学に関する美学観念は19世紀によりやく形成された。それは英国文学の民族意識と深く繋がっている。20世紀に、「文学とは何か」を解釈する美学理論と批評理論は数え切れないほど溢れていたが、相互に論争が存在しており、定説はない。ロジェ・ファウラーは「殆どの文学研究者にとつて、文学の概念は一種の思想で、常識に認められたものだ」<sup>(16)</sup>と指摘している。ファウラーはある一つの基本事実を指摘している。つまり、文学の概念は理論によつてはじめて構築されるということである。ロマン・ヤコブソン (Roman Jakobson)、ノースロップ・フライ (Northrop Frye)、ヴォルフガング・イーザー (Wolfgang Iser) の理論であれ、テリー・イーグルトン (Terry Eagleton) の『文学とは何か』、あるいはアン・ジェファースン (Ann Jefferson) の『現代文学理論』<sup>(17)</sup>などの著作であれ、同じ「文学」という名の下に、異なる理論によつて様々な文学実体が出現する。文学とは何かという問題に関して、人々は自分なりに各人各様の解釈と表現を行った。例えば、フランスの作家、サン・ピエール (St. H. Bernardin de Saint Pierre) は、「文学は天上の女神で、人類の病痛を払い消すために世に來たのだ」と述べた。ウィリアム・ゴドウィン (William Godwin) は「文学を各方面から見ると、人間の王国と動物の王国の間に大まかな境界線を引いたようなも

のだ」<sup>(18)</sup>と述べた。フランスの作家、シャルル・ノデイエ (Charles Nodan) は「文学は文字表現だ」<sup>(19)</sup>と述べ、イギリスの作家、ロバート・ウイلمット (Robert Aris Willmott) は「文学は錆びない言葉だ」<sup>(20)</sup>。パウンド (Ezra Pound) は「偉大な文学は究極に達した言葉である」、「文学は記事保存のための記事だ」<sup>(21)</sup>と述べた。これらの説は、全てが一定の理を有するが、文学とは何かという問題の答えをまだ明かしたものはない。

文学とは歴史概念である。その意味は、歴史の変遷に伴って変化するということである。歴史的な視野から文学を検討すれば、どんな作品が文学に属するか、どんな作品が文学に属さないかについては、異なる歴史時期ごとに異なる判断標準がある。虚構と事実という基準から文学史上の文学作品が判断されたこともある。17世紀のイギリスでは、シェイクスピア、ジョン・ウエブスター (John Webster)、ジョン・ダン (John Donne)、アンドリュー・マーベル (Andrew Marvell)、ジョン・ミルトン (John Milton) などの作品のほか、フランシス・ベーコン (Francis Bacon) の散文、ジョン・ダンの布教文、ジョン・パニヤンの自叙伝なども、文学に含まれていた。テリー・イーグルトンの指摘によれば、トマス・ホブズ (Thomas Hobbes) の『リヴァイアサン』 (Leviathan)、『英国内戦史』 (History of the Rebellion and Civil Wars in England) なども文学に包括されていた。19世紀のイギリス文学においては、ラム (Willis Eugene Lamb)、マコーリー (Thomas Babington Macaulay) 作品も文学に属していた。一方、今日の文学の検討で常に取り上げられるジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham)、

チャールズ・ロバート・ダーウィン (Charles Robert Darwin)、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer) の作品は文学には属さない。こうしてみれば、文学とは何かという問題はすでに生じて久しいものだと言えよう。

文学という術語の由来は、古代ギリシャに遡る。プラトンの著作には文学という術語はなく、それと類似した二つの術語、「詩歌」と「詩学」がある。詩歌は現在の意味での文学、詩学は詩歌を研究する学問を指す。すなわち、詩歌と詩学は古代ギリシャにおける最初の文学研究の用語というわけであった。ウエレックの指摘によると、「文学」という言葉が詩歌にとつて代わったのは最近二百年のことだという。<sup>(22)</sup>しかし、英語では「文学」という言葉は14世紀にすでに使われていた。中世末期から19世紀にいたるまで、文学は人間の知識教養を指していた。サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson) が1755年に完成した二巻本『英語辞典』 (The Dictionary of the English Language) では、文学という項目で、学問 (learning) と知識を上手に利用することと解説している。<sup>(23)</sup>現在の英語辞典では更に多くの意味が与えられている。例えば『オックスフォード英語辞典』は、「Literature」という言葉に対し三点の解釈を提示している。第一に、「文学」と著作に精通すること、人文知識文学素養。これにちではあまり使わない。第二に、文学作品；文学家の職業または創作活動・文学領域。第三に、a. 文学創作の全体ある国またはある歴史時期に創作された作品、あるいは世界すべての創作。狭義の文学は形式美と感情効果を重んじる創作を指して

いる。例えば、遊び文学。b. 特定のテーマを捉える創作と著作。c. あらゆる形式の印刷品。<sup>(24)</sup> 「Literature」という言葉は、文学だけを指すのではない。『コリンズ英語辞典』では、文学に関して六つの解釈を示している。第一に、書写作品、例えば詩歌、小説、エッセイなど。特に、文体表現および永遠な共同主題を特徴とした想像性作品。第二に、特定の文化または、民族が書いた物の集合体。第三に、特定の類型や主題について書かれたり印刷されたりしたもの。第四に、特定の種類の情報を提供する印刷物。例えば、科学文献だ。例えば、sales literature (販売カタログ)。第五に、作家の技能や専門性。第六に、過去の使用方・学問。<sup>(25)</sup> 全体的に見ると、現在の英語辞典では「文学」(Literature) という言葉には二つの意味がある。一つは文学、もう一つは文献である。「Literature」という言葉は、文学だけでなく文献材料も表している。「Literature」はむしろ、文献の意味としてよく使われている。以下に幾つかの例を挙げる。

第一に、A list of reference of the essential literature on a topic or subject (ある主題あるいは学科学論題・主題の基本文献参考目次リスト)。<sup>(26)</sup>

第二に、The sources consist not only of various dictionaries but also of works or phrase in the secondary literature on Middle English (資料出典は、各種の辞典だけでなく中英語の二次文献著作にある語句からなっている)。<sup>(27)</sup>

第三に、The reader will be directed to substantial discussions of the word or phrase in the secondary literature on Middle English (読

者に中世紀の中英語の二次文献にある文字と語句に関する重要な議論に誘う)。<sup>(28)</sup>

第四に、From what we can gather from the literature, the methodology has been tested by means of the creation of a few hundred dictionary entries but no complete dictionary has been compiled using this methodology (我々の集められる限りの文献から、この方法論はすでに何百個の辞書条目によって検証された。しかしその文献から推察すると、この方法論は数百の見出し語の創設によって検証されたが、この方法論を用いて編纂された完全な辞書はまだない)。<sup>(29)</sup>

要するに、語源からみれば、「Literature」という語は動態的で、歴史時期によって異なる意味を持つている。しかし、19世紀以降、「Literature」という語は主に文学全体を指すようになった。無論、文献という意味も現在まで存在している。

文学に使われる術語および文学術語の意味も、文学事実の発展にしたがって変化している。「Literature」という語の現在の用法は、19世紀以前の使われ方とは大いに異なり、すでに詩、戯曲、小説、エッセイや、それらに関連する理論と批評の術語として使われている。文学の歴史から見れば、文学の定義は文学の観念と深く繋がっている。歴史時期によって異なる文学観念がある。したがって、それぞれの文学定義も異なる。これは人類文明の発展が文学に反映された特徴である。ヨーロッパでは、古典文学に歴史、哲学、演説および科学著作も包括されていた。18世紀以前のヨーロッパでは、文学は、我々が現在に言う別種の学問としての扱う哲学、歴史などから完全には脱却し



ていなかった。これは、医学や他の数多くの現代自然科学が独立した学問として個別に分類されていなかったのと同じことである。中国の先秦文学では、文学は文章と学問を指していた。したがって、文学は歴史、哲学、エッセイなども含んでいる。これは中国文史一家の伝統でもある。

19世紀以前、中国の文学観念は西洋の文学観念より単純であった。それは、中国の文学現象が西洋ほど複雑ではなく、各形式の小説、戯曲や詩がまだ発展途上だったためである。中国の文学観念に哲学と歴史が包括されていたのは、当時の中国文学の現実によって決められたためである。20世紀以降、様々な文学形式が急速に発展してきて、文学と哲学、歴史は徐々に独立した学問へとなった。文学の独立は文史一家の伝統的文学観念を変えつつ、中国の文学批評と理論の構築にも深い影響を与えた。中国の文学発展史では、歴史時期によって文学の定義が異なっている。

要するに、こんにち、歴史を超えて、文学全体を概括できる定義を探すのは無意味な作業である。文学の観念と文学の定義を結んで、時代の文学現実に基づいて文学とは何かという問題を考えれば、一つの時代に限って相対的な定義が下せるかもしれない。それは、文学が絶対概念ではなく相対概念だからである。すなわち、歴史時期と倫理環境によって、文学概念の意味は異なってくる。文学の初段階では、一切の文字が文学とされていた。西洋の考古学者によって発掘された不完全な文字記録は、その担い手と内容を問わず、全て文学の範疇に含まれた。

人類文明の進展につれて、文字は簡単な記録だけでなく詩を書くことにも使われるようになった。例えば、古代ギリシャの叙情詩と史詩である。その時期には、文学の主要内容はこのような文学体裁を指していた。後に悲劇と喜劇、歴史や哲学およびその他の作品が誕生し、文学に新しい内容が加えられ、これらのテキストも全て文学に属すようになった。

文学の形式と内容がますます豊富になるとともに、テキストは類型によってその形式が一致しないということも指摘され始めた。こうして、文学にアイデンティティーの問題が生じてきた。すなわち、異なる類型、形式のテキストをどのように分けるのかという問題である。テキストを分類する要求が生まれてはじめて、人々は共通の特徴に基づいてテキストを分類しはじめた。その後、それぞれのジャンルの性質によって、テキストを文学に属させるか、新しく現れた文学以外の類型、例えば歴史や哲学に属させた。このような分類によって、歴史、哲学、倫理学などは文学から独立し、一つの学問になった。その一方で、新しいテキスト形式、例えば小説が文学に現れた。要するに、歴史時期に合わせて、文学概念は常に変化する。文学概念は歴史時期によって特定の意味を含んでいる。歴史にある文学の全体を概括できる文学概念は一つもない。

文学概念は、文学観念が具体化したものである。世界各国の文学観念の形成には時間差があり、文学に関する理解も異なっている。例えば、中国には文史哲一家という伝統観念がある。これは、文学概念が形成される前の文学観念である。したがっ

て、中国の古典文学には詩歌のほか、哲学散文、歴史記録なども含まれていた。もし現代の文学観念にしたがって中国の古典文学を定義するならば、哲学散文、歴史記録などは文学から排除されてしまい、中国の古典文学は極めて乏しいものとなるだろう。古代ギリシヤでは、最初の文学観念は詩歌に関するもののみで、後に戯曲、哲学、歴史などが加えられた。現代の文学観念が形成されてからは、哲学と歴史などは文学から分離され、独立した学問となった。現在でも文学と関連する哲学や歴史などの著作もあるが、文学として扱うことは今の文学観念とは合致しない。文学観念が異なれば、文学概念および定義も異なる。文学の形態が歴史や時代によって異なるといふ事実を無視すると、我々は文学の定義に関する論争を永遠に続けることになるだろう。実際に、文学の定義に関して、国内外でも定説がなく、そして見解が提出されてきた。例えば、文学は感情的な表現である。文学は現実世界への模倣と再現である。文学は言葉からできた材料である。文学は直感と本能欲望の表現である。文学は一種の芸術記号である。文学は一種の社会意識形態である。このように考えると、事実上、全員が認める科学的な文学定義を持たないと言える。歴史時期によって文学の存在が異なるのだから、それに伴う文学観念、そして、その文学概念と文学定義も異なるのである。

## 五、まとめ

文学の観念は歴史の過程を経て形成され発展したものである。異なる倫理環境の中で異なる文学が生まれ、また異なる文学観念が発生した。だから、学術思潮と批評理論の更新に伴い、文学倫理学批評には新しい傾向が見られてきた。それは、文学と言語学、哲学、心理学、経済学、政治、法律、コンピュータ科学、神経認知などの異なる分野とを結びつける傾向である。他の学科の理論と方法を吸収することによって、文学倫理学批評はその理論構築を改善させ、より深い発展を促進するのである。そういう過程においては、日本学者からの助力が欠けてはいけないのだろう。

### 〔注記〕

1. 倫理の視点から文学を分析することを指す。
2. 孫耀煜『文学理論教程』人民出版社、一九〇〇年、一頁。また、他の学者、例えば李衍柱（『文学理論基礎知識』山東教育出版社、一九八〇年、三頁）なども、同様の見解を示している。
3. 「文学は審美的イデオロギーである」という観念に関し、『文学原理発展論』（錢中文、中国社会科学院文献出版社、一九八九年、一〇〇〜一四六頁）を参照。
4. 劉安海、孫文憲編『文学理論』華中師範大学出版社、一九九九年、十五頁。
5. 岡嘉編『文学理論基礎』四川大学出版社、二〇〇五年、一頁。
6. 前掲注4に同じ。
7. 歐陽友權『文学原理』南方出版社、一九九九年、一四頁。

8. 前掲注4に同じ。
9. 張長青『文学理論教程』湖南師範大学出版社、一九九〇年、二十頁。
10. 童慶炳『文学理論教程』高等教育出版社、一九九八年、七五頁。
11. 陶文は中国最初の文字だと指摘している学者もいるが、定説にはなっていない。すでに出土された陶文資料は数が多く、例えば大・口文化、龍山文化、良渚文化時期として発見された陶文である。紀元前4800から4300年の間に生まれた半坂陶文は、最初に出土された陶文だと認定されている。現在発見された陶文は単独の記号になっていて、ほとんど識別できない。そのため、陶文が文字に属するか記号に属するか、未だに激しい論争がある。例えば、裘錫圭は陶文を「記号」としている。郭沫若は「文字の性質を持つ記号」と考えている。于省吾などの学者は文字だと指摘している。現在の資料では、甲骨文のような数個の文字からなるテキストはまだ見つかっていない。現在に発見された文字が記事の文字に属するか表意記号に当たるか、これもなお不明である。したがって、陶文は記事のテキストとして認められる理由が十分でなく、文学から排除された。
12. 詳細は『Literature』, Encyclopedia Britannica, Encyclopedia Britannica Inc, 2007を参照。
13. R・ウエレック、A・ウオーレン著、劉象愚訳『文学理論』江蘇教育出版社、二〇〇五年、九頁。
14. 前掲注12に同じ、11頁。
15. 前掲注13に同じ。
16. Fowler, Roger. 『Literature』 Coyle, Martin (Editor). Encyclopedia of Literature and Criticism. London, UK: Routledge, 1990, p.5.
17. 詳細は Jefferson and David Robey (eds.) Modern Literary Theory: A Comparative Introduction. London: Batsford Academic and Educational Ltd, 1982, pp.1-15を参考。
18. William Godwin, The Enquirer: Reflections on Education, Manners and Literature, in a Series of Essays, London: G. G. and J. Robinson, 1797, p.13.
19. A. Richard Oliver, Charles Nodder: Pilot of Romanticism, New York: Syracuse University Press, 1964, p.124.
20. Robert Eldridge, Arts Willmott, Pleasures of literature, the fifth edition, London: Bell and Daldy, 1860, p.6.
21. Ezra Pound, ABC of Reading, New York: New Directions publishing Corporation, 1934, pp.28, 29.
22. 詳細は Fowler, Roger. 『Literature』 Coyle, Martin (ed.). Encyclopedia of Literature and Criticism. London, UK: Routledge, 1990, p.7を参考。
23. サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson) の二巻本『英語辞典』(The Dictionary of the English Language) は、作成に9年かかり、1755年に完成した。その後の150年の間、この辞書は最も評判のよい英語辞典として使われたが、20世紀初めに『オックスフォード英語辞典』にその地位を奪われた。
24. 詳細は『Oxford English Dictionary, Compact Edition, 1971を参考。
25. 詳細は Collins Dictionary of the English Language, 1986を参考。
26. 詳細は Hartmann, R. R., James, Gregory, Dictionary of Lexicography, London: Routledge, 1998, p.123を参考。
27. 詳細は Steckenburg, Piet van, (ed.) A Practical Guide to Lexicography, John Benjamins Publishing Company, 2003, p.98を参考。

28. 詳細は、Coleman, Julie (ed.). *Lexicology, Semantics and Lexicography*. Manchester, 1998. p.236 を参考。
29. 詳細は、Pearson, Jennifer (ed.). *Terms in Context*. John Benjamins Publishing Company, 1998.p.76 を参考。

【付記】

本論文は、2022年中国浙江省哲学社会科学計画年度課題「『四書』の日本古典文学に対する影響研究」(22NDJC0012)と中国国家社科基金重大プロジェクト「当代西方倫理批評文獻の整理・翻訳・研究」(19ZDA292)の助成によるものである。

(中国・浙江大学外国語学院副研究員)